

散散思案した挙げ句に、大河内康治は口の端を思
い切り下げて、

「それじゃあ探偵を紹介いたしましょう」

と云った。

「探偵？」

こうした採め事に探偵とは、また頓狂な取り合
せだと思つたから、僕は聞き違いかと考えて即座に
問い返した。

大河内は探偵です探偵と、いつものように陰鬱な
調子で繰り返した。

「——探偵と云えば、あの、そう、尾行をしたり覗
き見をしたりして、素行調査や身許の確認をする族
ではないんですか」

そう僕が重ねて問うと、興信所だの調査会社とは

違うのですよと云つて、大河内は吊り上がった眼を
細め、端を下げたままの口を窄めた。それから自ら
偏屈者と称して憚らぬこの男は、むうと唸り乍ら僕
から視線を逸らし、机の上に置いてある手垢に塗れ
た布装の本を人差し指でこつこつと叩いた。それは
彼が常に携行しているニーチェだかサルトルだかが
著したと云う哲学書である。

大河内は一瞬その表紙に眼を遣り、そして思いつ
いたように云つた。

「そうだ、君、探偵小説と云うのがありますでしょ
う」

「探偵小説と云うと、あの、人殺しを興味本位に扱
つた如何わしい娯楽小説のことですか」

別に如何わしいとは限らないでしょう、と大河内
は云つた。

「銃後の文壇事情は兎も角、最近では市民権を得てい
るのじゃないですか」

「そうなんですか？」

「そうなんじゃないのですか。生憎と僕はそうし
た類のものは読まないのですが、面白いと評価する
者は多くいるでしょう。そうそう、この前の芥川
賞を取つた——松本某、あの人なんかは違うので
すか？」

「清張ですか？ 僕も受賞作の『或る「小倉日記」
伝』なら読みましたけれど——探偵は出て来なかつ
たと思えますけどね」

「そうですね。じゃあ違うのかな。それでは小栗某
とか夢野某とか知りませんか？ 君なんかは読む
んじやないのですか？」

「江戸川乱歩とか、大下宇陀児とか、そう云うので
すか？」

その程度しか思い出せなかつた。

「まあそうですね。そう云う人達の書いた小説です。
読みませんか」

「とんと読みませんねえ」

残念乍ら僕はその手の小説を好まなかつた。読ん

だ記憶がない。覚えているのは精精横溝正史の掌編
が数本で、しかもそれは探偵ではなく岡つ引きが登
場する時代ものだったように思う。その場合は探偵
小説ではなく捕物帖と呼ぶのだろう。もしかすると
読んだのは岡本綺堂だったのかも知れない。

僕が正直にそう告げると、大河内は腕を組んで、
なんだ君も読まないのかと云つて一層困つたような
顔をした。そして、読んでなくとも知りませんか
君——と無理やりに話を続けた。

「兎に角その手の小説に出て来るでしょう。名探偵
と云うのが」

「名——探偵ですか？ シャーロックホームズだと
かの？」

ああそれぞれ、ドイルだったかなと云つて大河内
は何度か頷き、

「紹介しようと言うのはね、その類の人ですよ」
と云つた。

「はあ。あの、天眼鏡てんがんきょう持ってパイプパイプ啞うわえているア
レですか？」

「そうそう。正にそう云う名探偵です。紹介しまし
よう」

大河内はそう云つてから改めてこちらを向いた。
形容がたし難い表情である。機嫌きげんが悪いと云うより、
羞恥てれしているように見える。

大河内はシャイな男なのだ。顔つきや肩の線など
は、あの宮沢賢治みやざわけんじに善く似ている。勿論僕は宮沢賢
治に会つたことなどはないけれど、写真で見ると限り
彼はこんな顔だつた筈だと思ふ。しかしそう見えて
いるのはどうやら僕だけのようで、本人は指摘され
たことなどないらしい。だから黙っているのだが、
それでも似ていると僕は思う。髪形が違ふだけで、
大河内の場合伸ばした髪の毛がやけに強いので顔全
体が細面ほそおもてに感じられてしまい、結果印象が随分違つ
てしまうのだろうと僕は分析している。坊主刈りに
したなら瓜二つである。

君は何を茫然ぼうぜんとしているのですかと大河内は問う
た。

「探偵と云うのは、この場合そんなに場違いですか
な」

「はあ、まあ——」

それは場違いだろうと思ふ。

「だつて大河内さん。名探偵と云うのは、慥たしかか思惟
推理の限りを尽くして、悪辣あくらつ非道な犯罪者の仕掛け
たからくりを暴あばき立てる正義の人な訳でしょう。こ
の場合——そう云うのはないです。そもそも推理
しなければならぬ謎はないです。何であれこの一
件の場合、犯人と云うか加害者が誰かはもう判つて
いるのですよ。だから法律家だとか交渉上手の商売
人とか、そう云う人の方が——」

ううん、と大河内は再び腕を組んで黙つてしまつ
た。困つたように首を左右に傾ける。端の下がつた
口許くちもとは見ようによつては笑顔にも見えるから不思議
なものである。

「——推理はしないんです。彼は」

大河内は熟考じゆくわうの末にそう云つた。

「推理しないって、それでは調査するだけなのです
か。それなら名探偵と雖も、一般のただの探偵と、
何等変わりがなくことになる。頭脳を使うから名な
どと云う冠かんざりがつくのでしょうか」

いや、そうじゃないでしょう、と大河内は否定し
た。

「一般の、浮気調査ばかりしているような連中だつ
て頭は使つてるでしょう。思考するのは何も名探偵
の特権ではない。反対に、幾ら名探偵が高邁こうまいな筋書
きを思いついたところで、被害者だの犯人だのを目
の前にして、そんな机上の空論を披瀝ひれきしていられる
ような悠長ゆうちやうな時間は取れないですよ、現実の事件
の場合。だいたいそれ程綿密めんみつな推理などできない
のです。できたところで証明も何もできたものじゃ
ないし、証明できても法的根拠は何もない——」

推理するだけ無駄ですと大河内は云つた。

「頭の回転が速いとか洞察力とうさつりしやくがあるとか弁が立つ
とか——そう云うことは名探偵の条件ではないよう
です。そうであるに越したことはない、と云う程度
でしょう」

「でも——それでは名探偵の名探偵たる所以ゆえんとは何
なのです」

僕がそう問うと、大河内は自覚ですよ自覚、と答
えた。

まったく以つて解らない。

僕の顔色を窺つてから、彼の場合推理は疎そか調査
も多分しないんだきつと——と、大河内は続けた。

「調査もしないのですか？」

「しないでしようねえ。あの人は」

何なのだ。それではいったい何をするのだ。

僕は不安になる。

大河内は湯飲みに茶を注いでひと口飲んだ。それ
から、しないんじゃなくてできないのか、と駄目押
しのように呟つぶやいた。

僕は益々不安になった。

そして同時に少少落胆した。

僕が、わざわざ仕事を休んで千葉くんだりまで足を延ばし、平素それ程懇意にしている訳でもない大河内に面会を求めたのには、それなりに深刻な理由があるのだ。こんな間の抜けた探偵問答がしたかった訳では決してないのである。

——そう。

大河内とは、三年程前に東北のとある湯治場で知り合った。

老人と病人しかいないひなびた湯治場の貧しげな景色の中で、彼はひとりだけやけに浮いていた。聞けば何でも進駐軍の何とかと云う将校の視察のお供で来ているのだと云うことだった。その頃大河内は進駐軍の相手の通事を職としていたのである。

僕へと云えば、その時は相当に落ち込んでいたのだった。

その、少し前。

電気配線の施工を生業なりわいとしていた僕は、仕事中大屋根から転げ落ちて強したたかに腰を打った。

怪我けがは治ったものの、後遺症が残った。医者には高所で細かい作業をするのは無理むりだろうと宣告された。配線工としては再起不能たつたのである。だから一応療養のための長逗留ながとどまりと云う建前けんぜんではいたのだが、半ば自棄やけくそになっていたことも事実である。

湯ゆに浸ひたかり乍はなら、僕は脱ドロップアウト落アウトすることばかり考えていた。

今更別の職業に就く気がしなかったのである。

死んでやれとまでは考えなかったと思うが、どうにでもなれと云う感じではあったように思う。仕事も好きだったし、何よりも若かった。たった三年前のことだと云うのに、その頃の僕は今よりずっと青臭いことを考えていたのだ。

そんな時、僕は彼に出会った。契機きつかけは覚えていないのだが、何とはなしに、気がつくとな僕は身の上話を滔滔たうたうと彼に語っていたのだった。

この続きは、書籍でお楽しみください。

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。